仏教を身近にする伝道誌　浄土真宗を弘める会

道標（どうひょう）

dohyo

2023 春季号

年間特集「まつり」

第二回・インドのまつり「聖と俗」　ニキレーシュ・ギリさん

連載

あなたのいのちの物語　悲しみの分かれ目
伝承を科学する　能楽における息込み
道しるべ　如来と等し

年間特集
「まつり」

インドのまつり
「聖と俗」

第二回
ニキレーシュ・ギリさん

インドでは世界中のどこよりもいろいろな種類の「まつり」があると思います。日々の暮らしの中で人々が深く信じる「何か」、それ故に人が引き付けられる「何か」、それを見出すこと、それが「まつり」だと思います。インドではその役割が大きい。多くの「まつり」、特に宗教的な「まつり」を祝うということは決して単なる慣習ということだけでは捉えられません。

まずは世俗的な性格をもつおまつりをあげましょう。国の重要な節目や歴史的な出来事をお祝いする「独立記念日」「共和国記念日」のような国家的なおまつり、また地方ごとその州ごとに建国記念日のようなものが行なわれます。例えば私の故郷オリッサ州では1936年から毎年4月1日にお祝いされています。それらはすべて公休日になります。そういった機会に家族やコミュニティーが集まり、そのめでたい機会をお祝い致します。お祝いするという行為は、私たちの歴史、文化、伝統そして宗教の一部であるという心を喚起させてくれるのではないでしょうか？

そして宗教的なおまつり。インドにはヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教、仏教、ジャイナ教など様々な宗教があります。ここで例をだすのはヒンドゥー教のおまつりですが、二種類に分けられます。一つは純粋に宗教的あるいはヒンドゥーの神々に関連したもの。シヴァ神祭「シヴァラートリ」、西ベンガル、オリッサ地方で盛んな女神ドゥルガー・カーリー、ガネーシュ神のおまつり。もう一方、宗教と生業（なりわい）が関連しているものがあります。例えば農業で種まきや収穫に関するおまつりです。種まきの前に祖先や神々に祈りを捧げる「ポンガル祭」。収穫後に感謝を捧げる「マカラ・サンクランティ」「ビフー」などがあります。その他「ディーワーリー」ですね。ここで祀られるのは美、富、豊穣の女神であるラクシュミーです。日本では吉祥天と呼ばれています。特に貿易商、ビジネスの人が多い神戸のコミュニティーの間では熱心にお祈りが捧げられています。

「ヴィシュワカルマ」これは製造業、モノづくりの神様です。おまつりの際にはインド中の工場が礼拝するということになっています。このように特定の神や、自然や生業のような職業に関連してしているものがあるということは興味深いことです。

ご存じのようにインドインダス文明は7000年前に起こりました。キリスト教文明の5000年前、はるか昔から文明が存在したわけですが、そのことがインドでは様々な宗教を生み出し、かつ様々な宗教的コンセプトを議論し続けることになりました。

魂の永遠性、救済、生まれ変わり、涅槃、生の苦しみ、次生のため徳を積むといったことが散々議論されてこられたということが、現代のインドの社会の素地となっています。西洋的な教育が行われ人々が科学的知識を得るようになって変わってきたという部分もありますが、私の意見では現在でも多くの割合のインド人は宗教的信仰を保持しているように思われます。また、科学的論理的な思考をもちながらもその深い内面では宗教的な信仰、あるいは死生観、

日々の暮らしの中で人々が深く信じる「何か」を見出すこと　それが「まつり」

生まれ変わり、超自然的な力、そういったものを信じている人々も同時に存在しています。

「クンブメーラー」　ラブリ・イムラヒム著より　撮影ラリット・ヴェルマ

7000年前から様々な宗教的コンセプトを生み出し続けているインド文明

「クンブメーラー」という12年に一度開催されるおまつりがあります。神と悪魔が不死の妙薬をたたえた水瓶「クンブ」をめぐって戦ったという話に由来しますが、元々は、8世紀の哲学者シャンカラが始め、求道者や哲学者が各地から集り哲学や信仰の議論の場であったと言われています。4か所で開催されるのですが、特に有名なのは聖なるガンジス河とヤムナー河が交叉するビラハバードです。今も身体と魂を清めるという目的で求道者、信者をはじめその雰囲気を味わいたい何百万人という人がインド各地から集まってきます。

インド東部に位置する私の出身地オリッサ州には「ラタ・ヤトラ」というおまつりがあります。ヒンドゥー教の四大聖地の一つに数えられるプリー市内のジャガンナート寺院。その神々が、おまつりが始まる頃6、7月はモンスーン、季節の変わり目で風邪をひいてしまう。熱を出している間お寺に籠りますが回復したので旅に出たいなといって信者によって山車（だし）に乗せられ出されます。このように供養や礼拝をされて旅をし、おばさんのいる寺院のところに7日間滞在してそして戻ります。9日間の「ラタ・ヤトラ」と呼ばれる神々の物語です。よく皆さんはこのおまつりが祇園祭りと似ていると言われます。多分山車や形式が似ているためでしょう。私自身は京都の祇園祭りに参加したことがありませんが、一度祇園祭りのお囃子を神戸で聞く機会がありました。なんとおまつりの鳴り物が私の出身地のキルタン（ご詠歌）のシンバル、ドラムなどの鳴り物のサウンドやリズムと全く同じでした。妻と私はびっくりしたことを覚えています。

弁天さん　東京

聖天さん　京都

日本で祀られているヒンドゥーの神々
文・写真　ビノイ・ベールより

ご存じのように仏教発祥の地はインドですが、仏教と共にインドの神々も伝わりました。しかしインドと日本では神々の役割が違うように聞きますが。例えば「ガネーシュ」「聖天さん」はインドでは智慧、知識、教育の神。「サラスヴァティー」「弁天さん」は文化、芸術の神。「インドラ」「帝釈天」はインド神話では雷、雨、虹、水を象徴する神です。それから性別、インドでは太陽神は男性ですが、日本では天照大神は女性と聞きます。もともとブッダはインド社会では慈悲、救済へ至る「道」を教える教師。神や神の化身とは見なされていませんでした。しかしその後仏教とヒンドゥー教は対立しつつもその位置づけが変化してきていました。ある時点からブッダは神の化身として受容されています。実際ジャガンナート寺院ではいろいろな神の化身の彫像の中にブッダがその一つに祀られていらっしゃいます。

このようにインドと日本は、共通の宗教、文化の土壌をもつアジアの国です。21世紀は、益々両国の関係は発展してくるのではないでしょうか？

ニキレーシュ・ギリ
在大阪・神戸　インド総領事

1978年、インド オリッサ州生まれ。州都ブバネーシュワルのウトカル大学で地質学の修士号を取得。2002年、インド外務省に入省。在オマーン大使館二等書記官、在インドネシア大使館一等書記官、本省インド太平洋担当部局長、西アジア・北アフリカ担当部共同局長を経て、2021年より在大阪・神戸総領事。

Your Spiritual Stories
あなたのいのちの物語

21話目

「かもめ」

アントン・チェーホフ

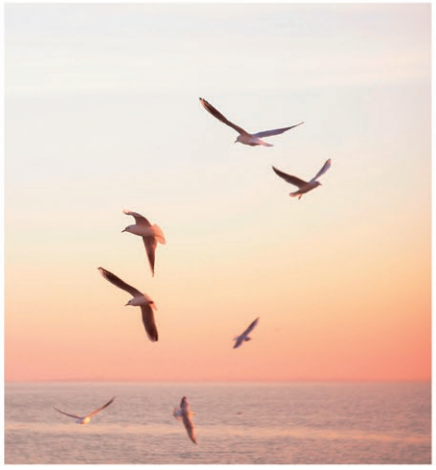
「悲しみの分かれ目」

チェーホフ（一八六〇年生）は結核のため四四歳で亡くなったが、晩年の一〇年ほどの間に書かれた四つの戯曲は今も世界各地でよく上演される。そのうちの最初の作品「かもめ」は、作家と女優を目指す若い男女と、彼らを取り巻く人々の愛と悲しみの物語だ。

成功している著名な作家でモスクワに住むトリゴーリンと、かつての女優で今はトリゴーリンの愛人であるアルカーヂナは華やかな世界に生きたい人々だ。だが、彼らが夏を過ごすウクライナの「田舎」屋敷には、アルカーヂナの高齢の兄で喘息もちのソーリンと、アルカーヂナの一人息子で作家志望のトレーブレフが住み、死の影が漂っている。

トレーブレフは母やトリゴーリンへの憧れを失っていないが、両者は彼に期待しておらず、あまり関心も払わない。ソーリンの湖畔の屋敷に逼塞するトレーブレフは、自殺未遂の過去もある。貧しさを嘆き、諦めの日々を送る教師のメドヴェーヂェンコ、トレーブレフへの愛を断念してメドヴェーヂェンコと結婚するマーシャなど、悲しみを抱える人々が行き来する屋敷でのやりとりが描かれる。

トレーブレフが好意をもつのは女優志望のニーナだが、ニーナの両親は娘が「ボヘミアンの巣窟」である湖畔の屋敷に行くのに反対だ。「でもあたしは、ここの湖に惹きつけられるの、かもめみたいにね。」ニーナはトレーブレフとともに、たまに訪れるトリゴーリンにも惹かれる。ニーナの気持ちがトリゴーリンに向かっているのを知ると、トレーブレフは心穏やかでない。猟銃で撃ち落としたかもめの死骸をニーナの足もとに置く場面がある。「おつつけ僕も、こんなふうに僕自身を殺すんです。」



そのかもめを見て、トリゴーリンがニーナに「ちょっとした短編の題材」が浮かんだという。「湖のほとりに、ちょうどあなたみたいな若い娘が、子供の時から住んでいる。鴎のように湖が好きで、鴎のように幸福で自由だ。ところが、ふとやって来た男が、その娘を見て、退屈まぎれに、娘を破滅させてしまう―ほら、この鴎のようにね。」ニーナはやがてトリゴーリンを追ってモスクワに向かい、容易ではない女優への道を歩み出す。一度はトリゴーリンと結ばれ子どももできるが、捨てられてしまう。

第四幕は再び皆が集まる夏の湖畔の屋敷だ。ニーナも密かにトレーブレフに会いに来ている。これから三等列車でひと冬の間、田舎で舞台に出るのだという。トレーブレフは言う。「あなたというものを失い…人生は僕にとって堪えがたいものになった―受難の道になった」。ニーナはトリゴーリンらへの失望と覚醒を語る。「わたしは―かもめ、いいえ、そうじゃない…。」大事なものは名声とか光栄ではない、じつは忍耐力だ。「おのれの十字架を負うすべを知り、ただ信ぜよ」とつぶやいてニーナは去っていく。

お屋敷ではトリゴーリンを囲み、アルカーヂナらが楽しいひと時をもとうとしている。その時、舞台裏からの銃声が響く。かもめはニーナではなくトレーブレフだった。

喪失の悲しみにおしつぶされて自らいのちを絶つ男性、ようやく気づき絶望する母、悲しみに耐えて一人で生きていく若い女性が対照され、閉幕となる。輝きを求める愛と情熱の裏面にある悲しみは、生きる力を奪うことさえある。裕福な人々が求めがちな虚栄が告発されている。とともに、悲しみが力を養うこともある。奥深いところから人を支えるいのちの泉にもなりうる。

島薗 進（しまぞの すすむ）
1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院グリーフケア研究所客員所長。著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生――帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちを〝つくって〟もいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

伝承を科学する

能楽における息込み

歌や管楽器の演奏においては、呼吸が大切だということがよくいわれる。適切な呼吸は、フレーズの流れを生き生きとした流れに変え、音楽の魅力をおおいに引き立てる。能楽においても同様に、呼吸は適切な「間」や「ノリ」を生み出すために、欠くことのできない要素である。

能楽ではふつう、「呼吸」に代わって「息」という言葉が用いられる。息を使った専門用語には、「息継ぎ」や「息扱い」などがあるが、ここでは、能楽で大切にされているユニークな言葉「息込み」を紹介したい。「息込み」はとくに、鼓や太鼓などの打楽器と笛からなる能楽の囃子で重要とされている技法のひとつで、現代は略して「込み」と呼ばれる。

簡単に説明しよう。小鼓や大鼓の演奏者は、打つ前に、かならず大きな声で「ヨォー」「ホォー」「イヤー」などという掛け声を出している。その掛け声に引き出されるかのように、手が鼓の皮から離れて前方に出される。掛け声に続く適切なタイミングで、手は皮の上に強く打ち下ろされ、「ポン」とか「チョン」などの打音が生まれる。

このように説明すると、鼓の演奏の一連の動作の出発点は、掛け声が始まるポイントであると思われて

能〈道成寺〉では、小鼓が、大きく息込んで、強く掛け声をかける　©吉阪一郎

しまうが、じつはそうではないのである。動作は、掛け声が始まる直前の拍から始まっている。その拍で、鼓の演奏者は心の中で強く「ツ」や「ン」と唱えつつ、息を少し出し、同時に、打つ方の手を、鼓の皮面につけて強く押さえ込む。この動作が「息込み」である。

この技法のユニークさを説明するためには、われわれに馴染みの、よくある四拍子の音楽の出だしと比較するのがよかろう。演奏を始めるとき、ひとつ前の小節から「一、二、三、四」と数えるとする。最後の「四」が、演奏を開始する直前の合図になるが、ふつうはそこが、息を吸う、いわば緊張を緩めるタイミングとなる。

一方、能の鼓においては、演奏を始める直前の「四」の拍は、心の中で「ツ」と唱えて力を込める「息込み」、いわば緊張を強めるタイミングとなる。息を吸うのは、「四」よりも前の「一、二、三」のどこかで済ませておかねばならない。

演奏の直前に息を吸うのではなく、「息」を体の中に「込める」ことによって、得られる大きな効果がある。それは、次に続く音の流れに、他のパートに依存しない独立性と力強さを与えるという効果である。そして、その力強さは、謡や笛など、同時に演奏される他のパートとの緊張関係、あるいは不即不離（つかずはなれず）の関係を生み出すことになる。能楽の演奏が、息を呑む、隙を許さない、張り詰めたような雰囲気を与えるのは「息込み」の技法によるところが大きい。

息という言葉は、同じ発音の「意気」とも通じ合う。「意気込み」という言葉は「何かをするときの積極的な気構え」という意味になる。思えば、日常の仕事などで意気込みを示そうとする際、われわれは息を少し吐き、そして大きな掛け声をかけて、ことに臨む。日常生活の中の意気込みと、能楽の技法の「息込み」とは、たがいによく似た、いやまったく同一の振る舞いなのである。

藤田 隆則（ふじた・たかのり）
一九六一年、山口県生まれ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えるための応用的研究に従事。

仏教を身近にする伝道誌 道標 二〇二三年 春季号 2023年3月1日発行 発行所／浄土真宗を弘める会 萬福寺内 大阪市西区南堀江 1-14-23 tel.06-6531-1328 fax.06-6531-1327 e-mail：ktda8.10@gmail.com

道しるべ

天岸浄圓（あまぎし じょうえん）

1949年（昭和24年）生まれ。本願寺派布教使。
行信教校校長、大阪教区東住吉組西光寺住職。

◆如来と等し

信心よろこぶそのひとを
如来とひとしときたまふ
大信心は仏性なり
仏性すなはち如来なり

『浄土和讃』

正嘉元年（親鸞聖人85歳）十月十日付けの聖人の『御消息』が、関東門弟の先達格である、性信房宛てと真仏房宛ての二通が伝えられている。また、同日付の慶信房からの上書も現存する。この三通に共通する法義は「如来とひとし」である。

もとは「諸経和讃」に『華厳経』の「聞此法歓喜信心無疑者、速成無上道与諸如来等」（この法を聞きて歓喜し、心に信じて疑いなければ、速やかに無上道を成じ、もろもろの如来と等しからん）の句によって、

歓喜信心無疑者をば　与諸如来等とぞく
大信心は仏性なり　仏性すなはち如来なり

と和讃されていた。それをこの時期に現行のように改められたのであろう。こそから疑問が提起されたと思われる。

関東の門弟たちには祖意が領解し難かった。慶信房からの書状には「信心よろこぶ人を〈如来とひとし〉と同行ののたまふは自力なり。真言にかたよりたり」といわれていると伝えている。多分、真言宗の即身成仏説と混同されたのであろう。

確に煩悩具足の凡夫でありながら、現生に正定聚に入るということさえも極めて領解し難い。まして〈如来と等し〉とまでいわれれば、大抵は混乱するであろう。

しかし、真仏房宛ての『御消息』には、「信心をえてことによろこぶひとは、釈尊のみことには「見敬得大慶　則我善親友」と説きたまへり」と記されていて、この言葉は『無量寿経』の「則我善親友」（すなはち我がよ善き親友なり）の仏語に依る領解と釈されている。すなわち釈尊から信心の行者に賜った讃辞。すなわち「諸仏称讃の利益」（他力念仏の行者はすべての仏から称讃される立場にある）から展開する法語であった。決して行者から発する言葉ではなかった。

仏陀をしても伝えることの困難な他力の法を正しく聞く者の誕生は、行者自身の慶びもさることながら、教授に尽力してくださった仏にとっても深い慶びであった。

諸仏が伝えるべき最勝の法は南無阿弥陀仏。行者が聞き受ける法も他力の南無阿弥陀仏。両者共に南無阿弥陀仏をめぐって説聴がととのった。聞かすべき法を聞かし得た。聞くべき法を聞き得た。説者・聴者の差はあっても両者の慶びに変わりはない。両者をつなぐ慶びの表現が〈如来と等し〉であった。

編集後記

近年、「自由で開かれたインド太平洋」という言葉を耳にする。21世紀、自由の海、繁栄の海として、新たにインド太平洋を戦略的に捉えようとする企てであろう。

ローマからインド、中国を経て日本までの交易ルート「シルクロード」。日本人にとって、NHK番組でよく知られていることである。しかし季節風（モンスーン）を利用した「海のシルクロード」といわれる海上交易圏も存在していたことを忘れてはならない。紀元一世紀からといわれる地中海、アラビア海を渡ってインドに達し、さらに東南アジアを経由して中国にいたる「海の道」である。活発な交易の中、仏教も陸上ルートの他、海上からもスリランカ、東南アジアに伝播していく。まさしく自由の海、繁栄の海、インド洋仏教文化・貿易圏である。島国である日本には、それらの「海の道」によって仏教やあらゆる文化、先端技術がもたらされた訳である。

さてブッダの遺訓に「自灯明」「法灯明」「自らをより処とせよ」「真理をより処とせよ」という言葉がある。混迷の時代、日本も「他をより処としない」視点を変えた自己の基準を改めて見直す必要に迫られてくるのではないでしょうか？

合掌

表紙の絵　壮年親鸞

今春は親鸞聖人生誕八五〇年 立教開宗八百年の慶讃法要が浄土真宗各本山で執り行われます。宗祖の御誕生、立教開宗を慶び讃えるということは、お念仏の教えに出遭い、自らにかけられた本願に目覚め、それにうなずく念仏者になりたいとの思いです。

親鸞聖人は釈尊の教えを、聖人が尊崇された七高僧の論註（註釈書）を通して『教行信証』を著されました。それは聖人の念仏往生についての確信であり、八割は引用であり、自身の独断な考えは入っていません。

早くして父を亡くし、出家して比叡山で学僧として二十年、法然門下の巻き添えで越後に流罪となられました。寒冬の越後の祖師像は必ず「もうす」という襟巻を纏い、およそ貴族とは程遠い、頬骨の張った厳しいお姿で表現されています。いかにあの時代に九十才まで煩悩具足の人として浄土門に真摯に生きられたかを思います。この世に生きている有難さを今、考える時代だと思います。

畠中光享（はたなか こうきょう）
日本画家／インド美術研究家／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい
株式会社 廣瀬佛檀店
0120-81-7065　06-6771-7007
タウンページ http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/（詳細地図有り）
〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪2丁目1-12
（四天王寺西門交差点　西へ30m）